

AJWCEF

NEWSLETTER 2015 年 5 月

Vol. 11

AJWCEF 会員及びご支援を頂いております皆様へ

皆様におかれましては平素より AJWCEF の活動にご理解とご支援を賜り誠にありがとうございます。オーストラリアは冬の気配が感じられる季節となってまいりました。

さて皆様も新聞報道でお聞き及びかと存じますが、オーストラリアの世界遺産の一つであるグレート バリア リーフ（大サンゴ礁帯）が開発や気候変動による海水の成分などの変化により、すでに約 50% が破壊され、このまま放置すれば 2050 年くらいには消滅する危険があると示唆されています。このサンゴ礁の破壊は主に海水の酸性化及び海水温の変化によるとされており、その原因は空気中の二酸化炭素濃度の上昇が挙げられています。残念ながら研究者の中には、各国が今から二酸化炭素の排出量を京都議定書など国際的な排出基準に沿った状態に戻しても、すでに起こっているサンゴ礁の破壊は止められないという意見もあります。

サンゴ礁の破壊はサンゴの損失にのみでなく、サンゴ礁に依存して生きている 2 万種を越すともいわれる海洋生物の生存にも直ちに関わってきます。これは多くの海洋生物がサンゴ礁を繁殖、隠れ家、えさ場などに広く利用しているからです。過去にも地球上では恐竜が絶滅したように生物大量滅亡が何度か起りました。世界のサンゴ礁も絶滅の危機に瀕したことは言うまでもありません。その後、おそらくはサンゴの三角地帯といわれるインドネシア、マレーシア、パプア ニューギニア、フィリピンなどに囲まれた西太平洋地域に僅かに生き残ったサンゴたちが徐々に世界に広がり絶滅前に近いサンゴ礁を再形成したと考えられています。ただこの再形成には約 2 千万年という気の遠くなる年月が費やされたと言われていています。僅か数十年の間に絶滅したものを再生するのに約三十万倍の月日がかかるのです。

AJWCEF はコアラやウォンバットなど陸上動物の保護だけでなく、海洋環境保護活動を行うオーシャン アーク アライアンスなどと提携し、海洋保護活動にも支援を行っています。オーシャン アーク アライアンスの代表であるデービッド ハナン氏は世界有数の海洋ドキュメンタリー映画製作者、兼、カメラマンで、現在までに世界でも評価の高いエミー賞を二回受賞するなどのすばらしい功績をあげています。彼はまたサンゴ礁を中心とする海洋環境保護にも情熱を傾け、各国でフィルム上映会やトークショーなども行っています。この 5 月にはハナン氏自身が初来日し、AJWCEF の協賛で東京のオーストラリア大使館及び関東圏の大学や高校で上映会などを開催いたしました。私も日本人としてはただ一人オーシャン アーク アライアンスの理事に選任され AJWCEF 同様オーシャン アーク アライアンスの活動にも関与することになりました。今後は日本においてほとんど未公開の、ハナン氏や彼のグループの世界一流の映像家や写真家の美しい海洋映像を日本の皆様にご紹介し、この美しい地球を我々の手でいかに守っていくか皆様と共に考えていきたいと思っております。オーシャン アーク アライアンス (<http://www.oceanarkalliance.org.au/>) の情報は AJWCEF のサイトで近日中にご覧いただけるようになります。では、今後とも AJWCEF の活動をご支援いただきますようよろしくお願い申し上げます。

AJWCEF

理事長 水野 哲男



2015年3月トレーニングコース（上級）レポート

（写真：2015年3月 野生動物保護トレーニングコース（上級）より）



佐伯悠季

日本に帰った時の最初の感想は、もう一度行きたい！でした。

今回この研修に応募した理由は“カモノハシの医術を見てみたい！”というもので、たとえカモノハシの治療を実際に見れなくても、野生動物の保護活動や獣医療が目の前で見られるのなら行く価値があると思い参加しました。

行く先々の講師の皆さんが、自分たちの仕事を丁寧に教えてくれ、その一つ一つが興味深いものでした。英会話など普段しない私でしたが、先生の通訳と、英語を毎日聞いていることでか、少しずつ自分でも聞き取れるようになり、質問をすることもできました。

オーストラリアでの日々が重なることにより強く思ったのですが、野生動物に対する意識の違いに驚きました。日本で野生動物といえば、農家さんや私のように田舎に住んでいる人、興味がそもそもある人など特定の人に関わるものですが、オーストラリアではもっと広く浸透しているように感じました。

オーストラリアに到着したその日から最後の日まで動物たちにどっぷりと浸かった7日間でした。また動物たちだけでなく、彼らが暮らしている環境をひとつひとつ丁寧に教えていただきました。この動物が暮らしていくにはどういう植生が必要で、それを維持していくにはどのくらいの人々の努力が必要なのか、そもそもどうして努力が必要になったのか・・・

ひとつひとつ答えを差し出したり押し付けたりせず、考えさせようとしてくれた先生には感謝の気持ちでいっぱいです。

また一緒に研修に参加した人たちとも、ご飯を一緒に食べて同じ場所で過ごしていたためとても仲良くすることができました。この研修に参加するという点で、似たような目的を持っていたからだと思えます。

この研修を通して、数えきれないほどのことを学び吸収してきました。この経験を決して枯らさずに、この先の自分の糧としたいと思います。

研修中ずーっとお世話になりっぱなしだった先生方、本当にありがとうございました。



右：佐伯さん 参加者の方と

岩手大学農学部獣医学課程5年 渡部祐未



カメの治療法を学ぶ

私がオーストラリア野生動物保護トレーニングに申し込みたいと思ったのは、オーストラリアの動物や保護活動に興味があったのはもちろんですが、「ぜひ海外に行ってみたい」という強い気持ちがあったからです。海外に行ってみたいと思ってはいたものの、初めての海外での生活への楽しみよりも不安や緊張を強く感じていました。最後に勉強した英語の記憶は大学1年生の頃の講義で、今までの人生で英語を口に出したことはほとんど無いと言って良いくらいでした。しかし、苦手だと思っていた英語も、現地のスタッフや子どもたちと会話することができ、「意外と通じた!」と、ほんの少し自信がもてました。

実習内容は、日本で普段目にするものとは全く異なる環境や動物たちなど、初めて見るものばかりで楽しく、興味深いものでした。中でも、コアラに関する知識はとても深まったと思います。私は日本で牛のルーメン内微生物の研究をしているのですが、コアラの盲腸内でも独自の細菌叢が発達していることを知って好奇心が掻き立てられました。カランビン野生動物病院では、多くのオーストラリアの野生動物の治療法、検査法を学びました。オーストラリア特有の動物たちについて学べたことは貴重な機会だと感じましたが、カメの甲羅の損傷や鳥の羽根の治療法など、日本の動物たちでも行えるような治療法を知ることができたのもとても嬉しいことでした。

このトレーニングコースへ参加させていただいて、私は自分の人生に広がりが見えたような気がしました。今まで自分は日本という国の中でしか物事を捉えきれていなかったことや、意欲と勇気があればたくさんの選択肢を持てるということを感じたのです。この感情は、初めての海外で生活できたこと、AJWCEFのスタッフの方々や現地のボランティアや職員の方々、獣医師の先生方、そして現地で知り合った仲間たちとの交流を通じて得たものです。トレーニングコースの実習内容もとても興味深いものでしたが、人とのかかわりが自分の感情や思考へとても良い刺激となりました。このトレーニングコースへ勇気を出して参加して本当に良かったと思っています。

大阪府立大学獣医学科卒 H.I



「AJWCEF 上級トレーニングコースに参加して」

野生動物保護、これは獣医系大学に入って漠然ともった夢であり、社会人となってからもこの夢を叶えるためにどのように進んだらよいか模索していました。そんな折に大阪での水野先生のセミナーを拝聴し、今回の参加を決めました。

デビッドフレイ野生動物公園の見学、カヌーによる河岸の野生動物探索（コアラを見つけたときは大興奮！）、モギルコアラ病院、そしてカランビン自然動物公園の動物病院を見学させていただくという、とても充実した7日間でした。その中でも4日間と長い間お世話になったカランビンの動物病院では、スタッフの方々が親切、丁寧に目の

前の動物たちの状況や獣医・看護学を教えてくださいました。特に有袋類、単孔類の生態は、目からウロコで大変興味深かったです。5年ほど小動物・動物園臨床に携わっていた身としては、実際に自分が診る場合を想定して質問が山ほどありました。また同時に自分の英語力の不十分さも身にしみた経験でした。

水野先生他、人生の先輩方のお話から、海外で勉強する可能性やオーストラリアでは何歳になってもやり直せるという人生観に勇気をいただきました。日本と海外の違いを見つめ直す、英語の勉強など今後の目標もできました。

また研修が終わるとみんなで地元のスーパーに買い出しに行き、自炊をしたのもいい思い出です。参加者は私他7名でしたが、年齢や出身は違うものの共通の目的のためすぐに打ち解けることができ、リラックスして過ごせました。

この経験を活かすべく頑張りますので、お世話になった皆様方、本当にありがとうございました。

2015年3月トレーニングコース（初級）レポート

（写真：2015年3月 野生動物保護トレーニングコース（初級）より）

大重春菜

今まで私は野生動物の保護に興味があるものの、将来獣医師としてどのように野生動物の保護に携わることができるのか分からずにいました。そこで環境・野生動物保護において先進国であるオーストラリアで実際に保護活動を体験したいと考え、今回この実習への参加を決めました。

たくさんの種類のオーストラリア固有の動物のことを学び関わったことや、カヤックに乗って野生で生きるコアラに出会えたこと、コアラ病院でのコアラの現状や命と向き合ったことなどの貴重な体験や、レンジャーや獣医師の方からのここでしか聞くことのできないレクチャーはもちろん、実際に保護活動をされている施設のスタッフやボランティアの方々と出会い、彼らの野生動物への思いやその活動を知ることができたこと、また同じ気持ちでこのコースに参加している仲間たちと出会って野生動物の保護についてそれぞれの考えや気持ちを語り合ったことも私にとってとても大切な経験になりました。また、この実習でいままで英語の重要性に気づいていなかった私は、英語を話せるということはこんなに世界を広げるのだということに初めて強く実感することができました。

この2週間、野生動物保護を体験し自分の目で見てお話を聞くことで、さまざまなことを感じ、考えさせられました。将来どのような獣医師になるかまだ決めかねていますが、私が一番好きなのは野生動物が



補助食を与える様子

野生で生きている姿であると実感しました。今後、どのような道へ進んでも野生動物に関してできることを探していきたいと思います。

小さな活動ひとつひとつが野生動物の保護につながるということを忘れず、今度はいつか私から野生動物や地球の生態系について周りの人々に伝えていけるようになるためにこれからも学び続けていきたいです。

鹿児島大学 獣医学部獣医学科2年 服部美紀



右端：服部さん
レンジャーと参加者の方たちと

今回参加したトレーニングコースでは、オーストラリアの豊かな自然を肌で感じ、たくさんのことを学んで、とても貴重な経験になりました。

モギルコアラ病院ではオーストラリア特有の野生動物について詳しく教えてもらったり、コアラを保護しているケアラーさんのお話を伺ったりでき勉強になりました。それぞれの人が様々な葛藤や考えをもちながらも動物のことを一番に考えて治療やお世話をされていたのがとても印象に残っています。

デイビッドフレイ野生動物公園では初めて見るようなたくさんの動物たちと触れ合ったり実際にお世話させてもらったりしました。日本よりも、動物たちが自然に近い環境でのびのびと暮らしているように

感じました。野生動物保護に対してオーストラリアで政府や社会がどのように取り組んでいるかを知って、日本での保護についても改めて考えさせられました。

2週間ではありましたが、自分たちだけでバスに乗り実習の場所まで通って、スーパーで買い物をして自炊し、現地の人々と同じような生活を体験できたことや、初めて出会った仲間たちと協力して共同生活をしたことは私にとってとても大きなものとなりました。

また、初めての海外で不安な気持ちもありましたが、オーストラリアの人々は皆優しく、英語の拙い私たちにもわかりやすく話しかけ助けてくださいました。何より一生懸命伝えようとして意思疎通ができたときは本当にうれしかったです。

様々な経験を通して実際に自分の目で見て感じるということの大切さを学んだ2週間でした。このような機会を設けてくださったAJWCEFのみなさん、一緒に過ごしたみんな、本当にありがとうございました。



※AJWCEF ホームページの「スタディツアー トレーニングコース体験談」のコーナー
<http://www.ajwcef.org/ajwcef-news.htm> でも参加者の皆さんのレポートを紹介しています！
またフォトギャラリーも是非ご覧ください！ <http://album.ajwcef.org/>

「オーストラリアにおける野良猫について」

アラシ マッキノン獣医師 クイーンズランド州立コアラ病院院長

野良猫は、哺乳類、鳥類、爬虫類や両生類といったオーストラリアの野生動物の主要な脅威となっている。

野良猫とは、ペットであったものが野生化し、人間に依存することなく生きる猫のことである。

オーストラリア政府はこの状況について非常に懸念しており、野良猫によって引き起こされた損害を軽減する方法について検討している。

問題は甚大である。— 野良猫はオーストラリア全域のあらゆる環境下にいる。彼らは非常に優秀な殺害者であり、得られる食べ物次第で食性を変える。例えば、ウサギの数が多ければ、選択的にウサギを常食とする。

オーストラリアの野良猫の明確な生息数は誰にも分からない。しかし、何百万頭という野良猫が存在する。野良猫による捕食は、多数の土着の哺乳類、特にビルビー、マラ (Rufous Hare-wallaby、コシアカウサギワラビー)、Woylie (Brush-tailed bettong、フサオネズミカンガルー) やナンバット (フクロアリクイ) などの小型から中型の哺乳類の絶滅や生息数の減少の主要な原因と考えられている。



野良猫の影響は日常的な野生動物の殺生だけではない。彼らは様々な病気を持っている。そして、その中の特にトキソプラズマ症はオーストラリアの哺乳類に感染し広がることもある。また、野良猫は食糧を巡ってクオルや猛禽類の競争相手ともなってしまう。

野良猫の広範囲な分布を考えると、撲滅は実用的でも経済的でもない。しかしながら、島々における野良猫の撲滅、そして保護フェンスで囲まれた区域から撲滅し、除外することは実行可能であると考えられる。

撲滅が不可能であるため、オーストラリア政府は野良猫による被害の軽減策を模索している。こうしたプロセスは脅威軽減と呼ばれ、政府は「野良猫の捕食による脅威軽減計画」を作成した。

この計画では、最も酷い損害を引き起こしている地域において、野良猫数を減らす方法を検討している。罠で捕獲することや銃撃などの方法が議論されている。この計画の重要な側面は、飼い主の責任という点にある。猫の飼い主が自身の飼い猫が絶対に野生動物を殺さないようにすることや、迷い猫になって野良猫の数を増やさないように努めるよう求めている。

イプスウィッチ コアラ保護協会 IPSWICH KOALA PROTECTION SOCIETY

『ハーディングー私たちのハートを盗んだコアラ』

By ルース ルイス

(イプスウィッチコアラ保護協会会長)



左からハーディング、ミスターバンジョ、
サイディ (コアラ幼稚園にて)
写真提供: リンダ・オリバー

全ての通報、全ての救助、そして全ての孤児は私たちのハートを盗みます。そしてある場合には心を打ち砕きます。しかし、ハーディングのお話は私たちだけでなく、ある特別な家族にとっても特別なものになりました。

2013年6月20日の早朝(5時頃)、イプスウィッチコアラ保護協会はとても動揺した一般市民から通報を受けました。彼女の犬がコアラを襲ってしまったのです。残念なことは、飼い主の彼女がその地域にコアラがいることを充分に知っていて、夜間はいつも犬は家のなかに入れていたという事です。それは本当に不幸なタイミングでした。犬が放たれたまさにその時に、そのコアラは(完全にフェンスで囲まれた)犬の庭を横切ることにしたのです。

これは私たちにとっては異例な出来事ではありません。イプスウィッチコアラ保護協会は、年間で平均約180頭のコアラを救助しています。しかし、このケースでは(犬に襲われた)コアラの袋の中に赤ちゃんがいました。運は赤ちゃんコアラの側にあったようです。それというのも、お母さんコアラが庭で、数頭いる犬のうちの一頭に引きずられている時、(飼い主はその後ろを懐中電灯を持って必死に追いかけていました)、赤ちゃんが袋から飛び出したのです。そして、赤ちゃんはすぐさまこの通報者に拾い上げられ、安全なところに保護されたのでした。

到着した時には、もうお母さんコアラは手の施しようがありませんでした。彼女はすでに亡くなっていました。しかし、赤ちゃんの方はケアを受ける事となり、モギルコアラ病院に精密検査のために搬送されました。そして、この救助を行ったヘレン・ダーベレイさんに引き取られました。

運命のめぐり合わせで、その赤ちゃんが救助された後の土曜日に、何人かのイプスウィッチコアラ保護協会のメンバーが、イプスウィッチ市の新しいレクリエーションのための公園—ハーディングパドック—の正式なオープンに出席していました。その場にはイプスウィッチ市の代表者たちとマスコミが来ていました。(それは全関係者にとって素晴らしいアピールの機会でした)ヘレンさんは、最近自分の家族になった赤ちゃんコアラにどんな名前が良いかと考えて、この土曜日まで名前が決まっていませんでした。

このオープニングに出席していたハーディング一家とその4代にわたる子孫たちが、赤ちゃんコアラにハーディングと名づけるインスピレーションになりました。彼はハーディングパドックから来たわけではないのですが、この地域はお母さんコアラの行動圏(ホームレンジ)内にありました。コアラには行動圏があり、救助された地点から半径5km以内に放される事になっています。私たちは、すぐに、野生に帰るときが来たら、ここが理想的な場所であると確信しました。ケアに入った時のハーディングの体重は571gでした。私たちはしばらくの間は予断を許さないであろうと知っていました。そして、彼がその厳しい試練を乗り越えると自信を持てるようになるまで長い時間が掛かる覚悟もしていました。

イプスウィッチコアラ保護協会は、救助活動および孤児を育てる活動を約20年間行ってきました。(2014年10月で20周年を迎えました。)その間、私たちは175頭の孤児を育て、無事に野生に帰しました。イプスウィッチの地域は、おそらく、クイーンズランド州東南部に残された最大で、かつ最も健康的なコアラ個体群の生息地といえるでしょう。



年中無休でレスキューを
行う救急車

2月28日に体重3kgで放されたハーディングを含め、現在までに、ハーディングパドックには4頭のコアラが放されました。

イプスウィッチコアラ保護協会は、約300人の会員と50人の野生動物ケアラーを有する非営利のボランティア団体です。コアラの救助とリハビリを専門としています。24時間週7日、二台の専用救急車を走らせており、また私たちの本部があるマウント・フォービスには、救助&リハビリテーションクリニックがあります。そして、非常に幸運なことに私たちには24時間週7日いつでも診察に駆けつけてくれる野生動物を専門とする獣医師がいます。



AJWCEFでは今後も献身的で愛情に溢れた野生動物ケアラーたちの活動の支援を続けていきます！

イベント情報



トレーニングコース

1. 野生動物保護トレーニングコース（海洋生物初級）

2015年8月15日～8月23日（9日間）

開催地：オーストラリア クイーンズランド州

2. 野生動物保護トレーニングコース（初級）

2015年8月23日～9月6日（15日間）

開催地：オーストラリア クイーンズランド州

両コースとも参加者募集中：2015年6月30日（火）まで

※詳細はAJWCEFホームページにてご確認ください。



初級コースでは、イプスウィッチコアラ保護協会のケアラー訪問も行っています！

活動報告

2014年11月から2015年4月まで



インターネット中継教育

1. オーストラリア ブリスベン市、レッドランド市、イプスウィッチ市、ゴールドコースト市などにある野生動物及び環境保護施設やクリーブランド地区高校、プレンベイル小学校と、岐阜県可児市にある可児工業高校を中継で結び、オーストラリアの自然、生活、環境保護活動などを英語で紹介する中継教育活動を実施。

スタディツアー

1. 2015年1月 横浜市立 横浜サイエンスフロンティア高等学校
2. 2015年2月 明海大学
3. 2015年3月 大阪府立 生野高等学校

野生動物保護トレーニングコース

1. 2015年3月上旬 トレーニングコース（上級）
2. 2015年3月下旬 トレーニングコース（初級）

事業

1. ユーカリ植林事業
（モギルコアラ病院、プレンベイル小学校、ケンモア・サウス小学校、AJWCEFでの共同事業継続中）
2. オーストラリア日本研究交流事業
（クイーンズランド大学、日本獣医生命科学大学、モギルコアラ病院、デービッドフレイ野生動物公園等）

セミナー及びトークショー

1. オーシャン アーク アライアンス主催、AJWCEF・ネイチャーパートナーズ協賛
世界有数の海洋映像家 デイビッド ハナン氏 上映会&トークショー
2015年5月9日 横浜市立 横浜サイエンスフロンティア高等学校メインホール
2015年5月11日 日本獣医生命科学大学 武蔵境キャンパス E棟111号室
2015年5月12日 明海大学浦安キャンパス 講義棟2102号室
2015年5月14日 在日本オーストラリア大使館

寄付

1. 2014年11月デービッドフレイ野生動物公園：\$ 240
2. 2014年11月モギルコアラ病院：\$ 1130
3. 2015年4月モギルコアラ病院：\$ 400
4. 2015年4月イプスウィッチコアラ保護協会：\$ 200
5. 2015年4月モギルコアラ病院：\$ 1200
6. 2015年4月クイーンズランド大学 \$ 700

AJWCEFスタッフ紹介

Jackson de Laat



ジャクソン・デ・ラートと申します。今年度4月からオーストラリア日本野生動物保護教育財団の事務所でアルバイトとして勤務する運びとなりました。現在、クイーンズランド大学で法学と日本語を専攻しております。2013年の後半に、日本獣医生命科学大学とクイーンズランド大学の短期研修に関わったことがきっかけで、オーストラリア日本野生動物保護教育財団に出逢いました。数多くのボランティアによるオーストラリアの野生動物の保護活動を見学し、これからの保護のためにまだどれだけの取組みが必要であるかを学んだことは目からウロコが落ちるような経験でした。オーストラリア日本野生動物保護教育財団に勤めさせていただき、光栄です。人間と野生動物との「より良い共存」の追求に貢献する事ができれば、幸甚です。



会員 (個人・法人) 募集 及び 支援寄附のお願い

皆さまのご支援が小さな命を助けます

詳細は、AJWCEFのサイトwww.ajwcef.org『入会・寄付』のページにお進みください。

ニューズレター発行元
オーストラリア野生動物保護教育財団本部事務局
発行責任者 水野哲男
編集担当 平野聡美
ホームページwww.ajwcef.org
住所 PO Box 1362 KENMORE,
QUEENSLAND, 4069, AUSTRALIA
電話 +61 7 3374-3909 FAX +61 7 3374-3531